

# आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館  
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市槇島町千足80

## \*\*\* 宇治キャンパス図書館 \*\*\*

京都文教短期大学図書館長  
幼児教育学科・教授 (美術) 岡本美晴

短大図書館は随分年を重ねてきたものだと思う。1974年に至道館が竣工して以来そこにあり一番変化しなかった場所かもしれない。古い蔵書に押しつぶされそうになりながらも、貴重な資料が現代の社会や研究に生かされている、いっぽう閲覧室では学生達のグループが絵本を囲んで楽しそうに談話する姿が見られる。電子情報化が進み、活字離れやインターネット利用で図書館の必要性を感じない学生が多くを占めるようになった今、この図書館も脱皮が必要だ。それは貴重な蔵書と学生達が喜々として学ぶ姿を手がかりにしてであろう。

ちょうど短期大学が開学した1960年代私がまだ子どもだった頃、一般家庭にはそれほど多くの本があったわけではない。それ以降我が家であっても引っ越すたびに本棚が増えていったように記憶する。いつの頃かその本棚にうす紫のライラック色の装丁の全集が置かれていた。全30巻ほどの詩の全集である。何も他にすることがないものだから、この中から好きなものをくり返しくり返し

読んだ。朔太郎や中也やその他の作家の詩篇がその頃の私には背伸びをすれば届くような心持ちであったし憧れでもあった。このわずかばかりの環境が、その後の私自身の物事の捉え方、心の根っこを培う一つの側面であったように思う。

大学時代は芸術大学であったので、本の中の活字を追うというよりは重い画集を開いた。四条河原町を少し上がったあたりに京都書院という書店があって美術関係の洋書が豊富に取り寄せられていた。もうとっくにそこにはない。様々な興味深い情報がそこにあり、友人達との待ち合わせの場所でもあり、ばったり出会った友人からあそこでやってる演劇がおもしろいとか、この展覧会に行った帰りだとか、情報交換の場所でもあった。ボーイフレンドには2時間も3時間も待たされたが、苦にはならなかった。今の学生には想像もつかない、あり得ないことだろう。スマホもインターネットも身近にない豊かでのんびりした時代だったと言ってしまえばそれまでだが、いやいや今の若い人々もかつて私たちがそうであったよう

に、さらに豊かなものを育てているのだ。このスピード化、情報化、グローバル化の時代によって生活様式も学び方も超特急で変化していることは自明のことだ。

我々の図書館も今の学生達の豊かさを育むため、彼らの希求に応えられるもの、愛される場所でありたいと思う。本に出会い、学ぶ仲間に出会い、情報を手繰り、希望をつかみ、挫折を味わい、生きる喜びを実感できるところ。四角い教室

では収まりきらない、もっと自由でクリエイティブな、今を生きる学びを支え、学び方に応じてそれぞれの居場所となれる図書館にしたいものである。本を読んでも読まなくても、宇治キャンパス図書館の教育環境がまちがいなく人を育てていく、そういう存在感のある場所を我々の知恵を結集して創り上げてゆかねば。

(おかもと みはる)

## ❁❁❁❁ 「児童書」を参考文献に ❁❁❁❁

総合社会学部 准教授(文化人類学) 古川 まゆみ

もう17、8年も前のこと、本学で初めて「講義」を行った際、学生から「楽しい話が聞きたい!」という要望が出た。「楽しい話? 漫才じゃあるまいし。」とは思いつつ、かつて自分が受けた講義の中で「面白くもためになった」ものを探してみた。いくつもあった。最も印象に残っていたのは、単位にはならなかったが毎回聴講していた「西洋美術史」。担当の先生は、スライドを駆使し、ご自分が撮影されたヨーロッパ各地の教会をととても丁寧に説明して下さった。地方の教会も多く、暮らしの息遣いさえ感じられる授業だった。学生の要望を受け、視覚の重要性を思い出し、「映像」を取り入れることに決めた。

これに加えて、ここ数年、講義準備の参考にしているものがある。それは、「児童書」である。自宅近くの図書館は、スペースの4分の1ほどを「子供用」に割いており、時々、気分転換をかね

てのぞいていた。すると講義のトピックスであるヨーロッパの年中行事(「復活祭」、「夏至祭」、「クリスマス」)が、児童文学書のタイトルとなっていたり、「もしや」と勘を働かせて手に取った本のなかにこれらの記述を多数見つけたりした。思わず児童書コーナーに長居をし、本来の目的を忘れて図書館を後にしたこともしばしばである。

何がそんなにおもしろいのか。私の場合、講義準備のためなのでストーリーそのものではなく、その中には含まれた年中行事に関する各記述である。たとえばスウェーデンの現代児童文学の中に私がフィールドワーク中には見なかったクリスマスの飾り物についての詳細な説明があったり、別の作品で100年以上も前のクリスマスの祝い方を読み、自分の経験から基本的な準備過程はあまり変化していないと納得したりする。フィールドワーク中は一か所に滞在していたため、これらの

記述はとても参考になる。

現在、児童書はたくさんあるが、私が注目しているのは、今さらと思われるかもしれないが、青色背表紙の「岩波少年文庫」である。はるか昔に、夏休みの課題図書として読んだ記憶はあるが、タイトルさえも今は覚えていない。ところが、現在、図書館へ行くとこのコーナーには必ず立ち寄り、来年度の講義用「参考文献」として推薦できるものはないかと探している。これまでに見つけた本の中では、アリソン・アトリー著『農場に暮らして』とレオン・ガーフィールド著『見習い物語』の二つは、来年度の講義や2回生ゼミの参考文献表に加えるつもりである。いずれもイギリスのもので、前者は19世紀後半から20世紀にかけてのクリスマスと復活祭について、後者は18世紀の「夏至祭」についての記述が詳しい。特に夏至祭は、私がイギリス滞在中（1980年代後半）にはすでに消滅していたと思われるので、その意味か

らも貴重な記録である。もっともこうした代表的な年中行事に関しては専門書からも知識を得ることは可能だが、客観的で簡潔な記述であるため、人々の動きや感情は伝わりにくい。ガーフィールドの『見習い物語』には、「無言のお菓子」と題した章の中に夏至祭の記述があるが、若い女性たちが未来の花婿を占うために行う涙ぐましい努力の数々がユーモラスに描かれている。夏至祭前夜、彼女たちは、長時間、無言でお菓子を焼いたり、この日のための一風変わった衣装を着たり、後ろ向きで歩いたりなどなど、試練をいくつも体験する。暖かく見守る両親、こういう風習を「ばかげた迷信！」とあざける兄などまわりの反応もさまざまである。このような一コマは学生たちがアカデミックな専門書を忍耐強く読解してもなかなか得られるものではない。「読みやすいが、実はとてもためになる」として児童文学書を参考文献表に加える所以である。（ふるかわ まゆみ）

## 「奇跡の夏休み」

ライフデザイン学科講師（調理学・応用栄養学（高齢者栄養）） 岩田 美智子

小学4年生の夏休みは本と過ごした夏だった。家の涼しい場所を見つけてひたすら読んだ。私の人生においてあれほど熱中したのは後にも先にもあのときだけだ。今になって思えば奇跡の夏休みである。きっかけはうちにあった「少年少女世界の名作文学」というハードカバーの全集で、1冊の中にいくつかの物語が納められていた。調べてみたところそれは1964年の9月から50ヵ月、毎

月1冊ずつ発行されたものらしい。

表紙には毎回違う1枚の絵があった。それはレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」やモネの「すいれん」やミレーの「落穂拾い」だったりした。つい最近、本物の「落穂拾い」を見た。私の住む田舎では、稲刈りが終わった田んぼで落穂拾いをして、それを小学校に提出するというのが秋の恒例だった。小学生の私は「外国の人も同じことす

るんだ」とその絵の中の人物の行為に共感したのだったが、大人になった私は「この人たち腰痛いやろな」という部分で共感した。ああ、私はこの絵の中の人たちより多分、きっと、確実に年上だ。

その時読んだ物語であるが、あまりに多くの話をいっぺんに読んだためか、あるいはその当時から記憶力が適当だったのか、ほとんど覚えていないのだ。おそらく内容うんぬんより読むという行為そのものが面白かったのではないかと思う。読むスピードがだんだん速くなっていくのは快感だった。大人になって似たような経験をした。随分前に3ヶ月ほど、公文教室で採点のアルバイトをしたときのこと。ひたすら小学生の計算の答え合わせをしているうちに暗算スピードが上がり、子育て中にめっきり衰えた集中力も回復した（ような気がした）。とすると、落ち着きがなかった私が小学校高学年頃からそれなりになってきたのは、夏休みの読書のおかげだったかもしれない。

唯一物語の中で記憶に鮮明なのは「デブの国ノッポの国」で、タイトルも内容もインパクトのあるものだった。その後も何度か読み返したが、その時の感覚は夏目漱石の「こころ」を読むときと似ている。これまで「こころ」は5回くらい読んだと思う。そして毎回、途中から読むスピードが加速し、一気に読みしてしまうのだ。もはや「こころ」はその内容が好きだからという理由からではなく、その一気に読みの快感を味わいたくて読んでしまう本である。のどをからからにして飲むビールのようなものかもしれない（飲めないのであくまでも想像）。

さて、小学生の夏休みの宿題の定番、読書感想

文。4年生の夏休み、読書三昧だった私にとって読書感想文なんてへのかっぱ…のはずだったが、読むと書くとは大違い。感想文を書くのはやっぱり苦しかった。ところが、その感想文を担当がクラスみんなの前で褒めてくれたのだ。なんとと言われたかはやっぱり覚えていない。その後何度か感想文を書いたが、感想文を書くことを前提の読書は全然面白くなかった。読みながら邪念が入ってしまい読むスピードも遅くなる。だから、大人になってからの読書は楽しい。誰も、読んだ感想を100字以内で聞かせてなんて言わない。どうだった？と聞かれば面白かったよとか、もひとつかなとか答えておけばいいのだから。

2学期が始まり、家にあった本を読み終えたあと、今度は小学校の図書室に通った。後ろの棚のちょうど目線の高さの左端にあった「巖窟王」から読み始めて、順序良く読んでいき右端に到達した時、すっと熱が冷めた。

余談だが、長女の小学4年生の夏休みは、友達と毎日外で秘密基地作りに熱中した。そして8月31日、読書感想文のために一番薄い指定図書を読んでいた。磯野カツオか！と密かに突っ込みを入れながら見守った。それぞれの夏休みがあると知った。(いわた みちこ)



## 👑👑👑 私のすすめる3冊（私の推薦図書） 👑👑👑

幼児教育学科講師（器楽・音楽教育） 岩佐明子

### ◎ 『オーケストラ楽器別人間学』

茂木大輔 著／新潮文庫 平成14年発行

著者は、オーケストラのオーボエ奏者であり、近年は指揮者としても活躍している。オーケストラの団員は使う楽器によって性格が違うということを、著者の経験をとおして楽器の特徴を解説しながら軽妙な語り口で語っている。自分が演奏したい楽器を選ぶ時に性格や環境が影響し、楽器を練習している内に後天的に性格が楽器の特徴に沿っていくという冗談のような話だが、私の周りの奏者を思い起こすと、失礼ながらかなりの部分で当たっていると思う。オーケストラの楽器のみ登場しているので、今後は声楽家やピアニストについても是非書いてほしいと思っている。

### ◎ 『阪急電車』

有川 浩 著／幻冬舎文庫 平成22年発行

この本は、阪急電車の今津線を舞台にした小説で、小説としても大変面白いが、駅名やその周辺の環境の描写が頻繁に出てくるので、土地をあらかじめ知っている面白さが倍増する。私事だが父方と母方の実家、私が育った家、ピアノの恩師2人の御宅、通った大学が全て阪急沿線にあり、とにかく阪急電車にはよく乗っておりこの本に出てくる土地は全て見知ったものである。旅行から帰り、阪急電車の車体や座席の独特の色、宝塚歌劇の中吊り広告などを見ると、ホッとする。阪急電車に揺られながら読むと格別である。

### ◎ 『雪と珊瑚と』

梨木香歩 著／角川文庫 平成27年発行

雪と珊瑚はどちらも登場人物の名前で、雪は赤ちゃん、珊瑚はその母親でシングルマザーである。安心して口にできる食材を使った料理を提供し、来た人がいつまでもくつろげるカフェを作りたいという珊瑚の夢が、周りの人たちの温かい応援と厳しい現実へ立ち向かうための助言で徐々に形になっていく。文中にたくさん登場する料理は、安全な野菜そのものの味を生かしたレシピで、とても美味しそうで作ってみたいくなる。

（いわさ あきこ）



# 図書館のウラ噺



## 本が「図書館資料」になるまで Part.2

図書館に並び新着資料。図書館員がいったいどんな手順で登録しているのか？  
今号では、目録が終わった資料が貸出できるようになるまでを紹介します。

Continued !

### 装備

#### Preparation



目録が終わったら装備です。1冊ごとにバーコードと資料ID(登録番号)シールを貼り、請求記号ラベルや配架場所シールを付けて、どこに配架するのか識別できるようにします。手作業！  
地味ですがとても大事な仕事です。

### 装備確認 Final Check

正しく装備されているかどうか、ほかの人の目でダブルチェック！

### 状態変更 Status Change 新着配架 Shelving

請求記号順にブックトラックへ並び、本の帯などを飾って配架準備完了。  
OPACの表示を「整理中」から「貸出可」に変更して、カウンター近くのフロアに並びます。

### 購入希望者へ連絡

#### Contact to Requester

リクエストされた方へお知らせ。  
お待たせしました！  
申込館のカウンターで1週間、取り置きしています。

### 貸出 Loan



図書館カウンターか自動貸出機(大学図書館のみ)で貸出！  
延長手続きはWebでもできますので、活用してくださいね。

図書館員より

いかがでしょうか？ このような手順で、  
図書館では大学、短大合わせて年間に約1万点の資料を受入しています。  
今後も皆さんの学習に役立つ資料をお届けしてまいります。ご利用お待ちしております！

Goal !

